

令和5年度事業報告書

令和5年4月1日から令和6年3月31日まで

(特定非営利活動法人九州コミュニティ研究所)

1 事業の成果

私たちは第20期（2023年度）の事業計画の総合テーマを、「FOCUS ON ACTION（行動重視）」としました。このテーマは、自分たちの驕りや慣れを正し、もう一度活動当初の思いを取り戻す一年にするために、と考えたものです。そして、自分の勇気を持ち続けるための合言葉のようなものも準備してみました。

正解ではなく信念を。

慣れより勇気を。

理屈ではなく行動を。

そのような一年だったはずの今期の全体を振り返るとどうだったのでしょうか？私たちは、どうも胸を張ってトライしたとは言えない一年なのではないかと考えています。これまでと変わらず社会的ニーズに対応するデザインを行うことはできています。むしろ、NPO業界の中で、私たちほどニーズのクリアと共に自分たちがなすべきことを両立させている団体はいないのではないかと考えています。しかし、デザインがそのコミュニティを、社会を変える可能性があるということを信じてデザインを追求しているようには感じないのです。ほんの少しの差なのかもしれませんが、その差が次の時代につながる価値観なのではないかと考えます。

一方で、可能性のある事業もいくつも見られました。特筆すべきは、3期目に入っている指定管理事業でしょう。管理業務を中心とした事業の中で、特別な取り組みとして行われる指定管理者企画事業は、これまでもJVとして力を入れてきました。しかし、コロナが完全に明けた今期、これまでイベントや事業を経験していないスタッフばかりの中で、しっかりと引き継がれこれまでにない地域の方の笑顔を生み出したことは大きな成果と捉えています。現場のスタッフは、デザインの知識やスキルなどありませんが、まっすぐ達成に向かって誠実に活動する様子は、まさに「FOCUS ON ACTION（行動重視）」だったのではないかと思います。他にも、若い力や外との協働など、多くの誠実な皆さんとの仕事を通じて、見て感じた目の前にある美しい姿勢に、もう一度目を向け、自惚れた自分たちをもう一度奮い立たせることの必要性を痛感しました。

また、周辺のNPOにも大きな変化が起こっています。スタートアップのメンバーの高齢化による経営層の若返りです。しかしこの社会的に重要な変化において、多くのNPOが躓いています。それは、引き継ぐことに重きを置きすぎて、もう一度最初からになってもいいから歩いてみようという姿勢がないことが原因なのではないかと考えています。ここでも挑戦する姿勢が問われています。この価値観が大きく動いている社会において、デザインの力を信じて活動を進めていくには、もう一回り成長した僕たちCRIKになる必要があるのではないかと思います。これからもCRIKは、挑戦をし続けることができる組織でいようと考えています。

1-1 事業分析

2023 年度（20 期）は、「FOCUS ON ACTION（行動重視）」をテーマとし、「結果が減収となっても、自分たちの活動を見直し整える期間とし、実施する事業は社会的期待に応えるために効率ではなく品質に重点を置き丁寧に進める」ことに主題を置いた展開としました。そのため、予算案ではマイナス 280 万と設定していましたが、想定以上の受託事業や、新しい指定管理業務の提案事業など、九州コミュニティ研究所に対する期待を感じられる状況となり収入が増大しています。またそれに加えて、支出の方もコスト削減に努め、最終的にはプラス 193 万となりました。

結果的には収支がプラスになりましたが、事業によっては進捗が停滞し品質に重点を置いたと言い難い結果になったものもあります。またコスト管理も軽視され不安定な状態が続き、ディレクターの実力不足が露呈する年度となりました。今期を教訓とし、今後はより精度の高い事業計画を各ディレクターと共に改善を図ります。

1-2 事業の報告

A：チームの利点を最大限活用する

①新セクション（ユニバーサルデザイン セクション）の再編成

②セクション毎の事業整理と他セクションへの連携や移譲

事業スキームを見直す中で「パブリック」「ソーシャル」「コミュニケーション1」「コミュニケーション2」という従来の4つのセクションを3年ぶりに見直し、新しい価値観や多様性を受け入れるデザインセクション「ユニバーサルデザイン」を新設、セクション再編成を行いました。

再編成にあたり、社会の流れや次の時代を見据えて「伝わるデザイン」をつくるといった明確なセクションコンセプトが立てられ、私たちはセクション単位のみではなく、他のセクションと連携しながら事業に取り組むことができました。ミニふくおか 2023 ディレクション業務や福津市共創による未来創造支援業務など、複数セクションで連携を行いながら取り組んだ事業も多く発生し、プラン作成セクションとデザイン制作セクションの共同作業によって CRiK らしい事業実施につながっています。

B：コミュニケーションを軸とする

①情報共有の機会をつくる

②他視点で事業やメディアを見直す

③信頼あるネットワークをより洗練させる

第20期は事業会議での事業における情報共有の機会づくりに注力しました。事業会議は、各事業における KPI フォーマットの作成、運用など、多角的な視点での事業の進捗をチェックすることが望まれています。が、あまり肯定的な結果は得られませんでした。事業会議のあり方は大きく改善する必要があります。

また、本格的に再始動した法人の新しいウェブサイトでは事業情報の発信を積極的に展開、アクセス等も増えています。コロナ禍によって増加したリモート会議なども活用することで、リアルとオンライン両軸でのコミュニケーションが増加したと考えます。今後もコミュニケーションを大事にし、私たちとともに新しい価値をつくる仲間たちと連携できればと考えています。

C：共につくる機会と場を提供する

①場を整えながら、技術を伝える

新たに作業場兼倉庫を、事務所に近い博多区東光に設けたことで、ものづくりの環境を整えています。合わせて綱場事務所内の環境整備への取り組みも動き出しました。技術を持つ所員から工具や機材の使い方を学ぶ良い機会になっています。実際に作るという行為を行うことができる場を持つことが、クリエイターたちにとって大きなモチベーションの起点になったのではないかと考えています。

1-3 管理の報告

①新しい仲間・職員の増加

九州コミュニティ研究所は職員の平均年齢が 45 を超えてきました。特に上の世代が体力、健康ともに万全と言える状態に無く、社会から期待されている業務を十分にこなすためには、有能な人材を迎えるべき時期に既に入っておりました。そのため第 20 期はリクルートを展開、3 名の職員を迎えました。法人が代表を努める指定管理施設での業務や、経理・総務関連の業務に携わっています。

②管理能力のパワーアップ

長年の懸念事項である、法人内部の基盤となる経理や総務部門のリクルートを実施し、大きな成果をあげつつあります。特に総務に関しては第 20 期から機能を共有や起案で上げていくために「総務会議」を展開、参加するメンバー間の共有や進捗チェックを強化、さらに春から経理や総務に理解のある新メンバーが加わったことで連動性が向上し、法人の全員が中身を整える方向に推進し始めています。

③労働環境のより良い整備

職員対象の労働環境の整備に着目しました。以前から取り組んでいる給与体系の整備に加えて、就業規則をはじめとして、職員が働けるルールの見直しや改善、内部での提案、申告用の書式やルールの整備、そして PC に代表されるデジタルツールの貸与、運用ルールの構築など、実際の労働に関わる部分を整えています。

1-4 セクションの報告

① パブリックデザイン

第20期のパブリックデザインセクションは、コロナ禍を抜けて動き出し始めた市民活動を後押しするサポートを中心に、公共サービスが社会に求められている役割を今一度見直し、公共と市民がもう一度歩み寄る場づくりを進めました。

この方向に注目した背景として、2023年3月に福岡県NPO・ボランティアセンターが移転・規模縮小し、市民活動を支える公共サービスのあり方を見直す大きな動きがありました。市民にとって必要なサービス・支援が何かを問われる、評価のデザインが必要な時期を迎えたと思われます。

○あすみん指定管理事業

昨年度は利用者や登録団体とのコミュニケーションポイントを積極的に増やしました。狙った成果として、利用者数が大きく伸び、また、9割以上の登録団体が更新を行い、施設の存在意義を示すことができました。相談事業では、相談内容を職員で共有し、適切な回答を検討することで、「あすみん」の事業につなげる結果になるなど、一つの相談から「あすみん」の事業として組み立てて実施するなど、高い品質での公共サービスが提供できたのではと推測します。また、職員の育成にもつながりました。

さらに、一昨年度から市民局と進めている「指定管理者の評価」について、評価基準の見直しを図り、その成果として、令和6年度からは自己評価シートについても、外部からは評価しやすいもの、内部としては注力すべき箇所を明確にできるものという目標でブラッシュアップを行い、評価をもとに「あすみん」の管理・運営、事業実施に取り掛かる環境が整いました。

○地域交流センター指定管理事業

昨年度から福岡市西部地域交流センター「さいとぴあ」が3期目を迎え、指定管理を受託している2つの地域交流センターでは、10年を超えて地域の交流の場作りに携わることとなりました。

「コミセンわじろ」では、地域主体の賑わいの場づくりを進めました。子どもの日に開催した『GO!GO!えんにち』では、福岡工業大学や地域ボランティアなどの協力を得て、地域の賑わいや交流を生み出している縁日を取り込み、行列ができるほどの子どもたちが集まり、楽しめる1日となりました。

また、「さいとぴあ」では、市民に社会性を感じさせる場づくりを進めました。『さいとぴあ環境大学』では、学識経験者からの専門的な講座に加えて、映画の鑑賞や企業から提供された試食などの興味を持って関わりやすい切り口を提供することで、市民が環境問題を体感している機会となりました。これまでも『ぴあマルシェ』や『さいとぴあ映画館プラス』に取り組んできた蓄積が生み出した成果です。

また、委員会という新しい運営方式に移行、より現場からの提案が上がってくる仕組みとなり、本部からのアドバイスを踏まえた品質の高い企画事業の実現へとつないでいます。

○一人一花「まち・ひと・しごと」づくりプロジェクト企画運営等事業

福岡市が進める花を通じた共創のまちづくり「一人一花運動」に携わりました。植物園に設置された「ボタニカルライフスクエア」を中心として、「一人一花」運動の拠点となる植物園の魅力づ

くりを担いました。実施にあたっては、幅広い分野で活躍するまちづくりを仕掛けている方々を「一人一花コンダクター」と位置付け、植物園の活性化を通じた花を通じたまちづくりを進めました。

夜間の植物園を利用して植物にまつわるリキュールを提供する「ボタニカルガーデンバー」や、利用が少ないサロンを活用した「秘密基地づくり WS」などの実践を行い、新しい利用者層の開拓に着手しました。また、本事業の財源となる企業版ふるさと納税を促進する寄付メニューづくりを行い、民間企業が公共サービスをサポートする仕組みの強化を図りました。企業や市民が関わる公共的なスキームを構築する役割を担う事業ですが、事業進捗には大きな課題が残るものとなりました。

○折尾駅北側まちびらきイベントワークショップ企画運営事業

2000 年から検討が進められてきた折尾駅の改修工事が終わり、新しい折尾駅のまち開きイベントに関わるワークショップを担いました。折尾駅は洞海湾と遠賀川を結び、経済の発展を担った堀川の沿線にあり、歴史的にも北九州の発展を担った地域住民にとって愛着のある場所です。新しい駅の完成に伴い、新しい街・駅前広場の使い方を提案しました。

イベントで作成した什器は、地元の建築・デザインを学ぶ学生チームと共に作成し、このまちびらきイベントだけでなく、再活用が可能となるデザインで製作しました。

また、ワークショップでは、小さい子どもでも関わりやすい駅舎のぬり絵や街の思い出を書いてもらうアンケートなどにより、市民が折尾駅への愛着をつくり・深める接点をデザインしました。イベント後にも活動につながり、地元の有志と学生が共働し、イベント後に学生が集まるまちづくりサロンづくりへと続いています。

② ソーシャルデザイン

アフターコロナにおいて、市民活動・地域活動が活気を取り戻していく中、一方で社会情勢の大きな変容についていけない市民や組織も多くあり、あらゆる仕組みやルールに社会的なデザインの最適化が求められる一年となりました。第 20 期、ソーシャルデザインセッションでは、「市民に自治を取り戻すデザイン」をテーマに、これまでの耐えて頑張るというスタイル一辺倒だった市民活動に加えて、個人としてのやりがいや充実感の体得を基盤とした市民活動の創出に努めました。

イベント等のシーンにおいても、市民活動実践者とのコミュニケーションや参加協力を促すなど、「他者の価値観を巻き込むことによる発想の活性化・多様化」を行動する上での基軸として重視し、社会変化の激しい状況に対応しました。また、今期でソーシャルデザインのセッション職員が卒業し、責任者だけのセッションになっていることは大きな課題です。

○福津市共働による未来創造支援業務

「福津市未来共創センター」（愛称：キッカケラボ）は、新しいかたちのまちづくりを創出する公設民営の施設として、従来からの NPO・ボランティアの支援に加え、企業・事業者や学校、福津市に関係性や関心を持つすべての人にその対象を開き、幅広い施策を実践する場所です。2023 年 7 月の開館以来、二年度目となる今期は、将来的な予算減少を想定し、永続的な運用に備えた基礎的コンテンツの生み出しや、無駄として削ぎ落とすべき点の選別を狙った一年となりました。市

民サポーターを束ねる仕組みとなる「ふくつプレイヤーズ」の創設や市民とボランティア体験をつなぐ足掛かりとなる「ふくつたいけんプログラム」の定着、市民活動に意義を感じてくれる市民の創出を目指しその体系を整理した「市民活動と幸せの9つの関係」、気軽な気持ちで市民活動への学びを得られる場となる「キッカフェ」の仕組み化、テーマ型ネットワークの創出が期待できる「テーマ型円卓会議」の実施、郷づくりをはじめとする地域との繋がりへの起因となる「地域デビュー講座」の開催、企業が福津市のまちづくりに参画する仕組みづくりなど、その足掛かりとなる多くのプログラムを創出することができました。

○第6次大野城市総合計画後期基本計画市民ワークショップ運営業務

○大野城コミュニティ構想策定ワークショップ

○大野城市南地区コミュニティまちづくり計画策定コーディネート業務

この3事業は、ともに大野城市での業務で、実施する内容としては市民を集めたワークショップとその成果を集約し、今後の計画策定に活かしてもらう事業です。3事業は同じ自治体の中での取り組みではありますが、それぞれのスキームは、市のマスタープランに係るものから、コミュニティ全体のあり方の制度設計、地域自治を担う市民自身のまちづくり計画づくりとそのスケール感が異なっており、これらの計画策定に同時に携わることは、一つの自治体の地域自治が醸成されるシーンを目撃できる貴重な機会となりました。市民に自治を取り戻すという価値観について、大野城市での経験からみると、市民が率先して自治活動に参画する機運は、まだまだ脆弱なものであり、市民の自発性を高めるという点において、さらなる仕組みづくりが求められることがわかりました。

③ コミュニケーションデザイン

第20期、コミュニケーションデザインセクションでは、最適なアウトプットを生み出すために、他者とのコミュニケーションに重点をおいたプロセスでのデザインに力を入れてきました。新規事業も継続事業も、クライアントとの協議やこちらからの提案の接点などを丁寧につくり、交わした議論をデザインに織り込んだことで、強度の高いアウトプットとなりました。

○四万十川流域の文化的景観情報発信事業

四万十川流域の5つの市町および公益財団法人四万十川財団とともに推進している重要文化的景観に関する情報発信事業です。令和4年度に新たな切り口の情報発信手法として開発した「サステイナブルシマント」の仕組みでは、四万十川流域の文化的景観の情報発信の切り口として、各地に点在する暮らしの中の「川との関わり方」の情報を収集し、共通の価値基準で評価し、再整理し、発信をしていく計画を策定いたしました。

続く令和5年度では、その実施に向けた取り組みとして、5市町で情報発信する対象物をピックアップし、ひとつひとつの情報を整理・共有しながら、サステイナブルシマントへの認定審査を行いました。特にポイントとなったのは5市町のみなさんと、6つの評価軸と採点基準を何度も議論して、再設定したことです。これにより「何を対象に、何を大事にして、どんな視点で発信をしたら、より価値が伝わるか」という事業の目的がクリアに反映された26個の認定対象を選定することができました。令和6年度には、引き続きこれらの情報発信を進めていながら、市民や観光客へと直接アプローチするワークショップ型事業として展開します。

○福岡市博物館ブランディングパートナー事業

博物館だより「Facata」は、2014 年度発行の 95 号より、私たちがデザインを受託している紙媒体です。福岡市博物館が所蔵する資料は市民にとっての宝であるという基本的な姿勢は保ちながらも、2020 年度から編集方針の提案を行い、期間限定の「特別展示」ではなく、日々の博物館で観覧できる「常設展示」に大きく着目した内容で編集・デザインを行なっています。その結果、全国の博物館や読者の方々からお手紙が届くなど、じわじわと新たなファンが付いてきています。

また、新たなチャレンジとして、令和 5 年度はスマホからでも読みやすい縦長レイアウトの「PDF 版」を制作し、はじめて公開いたしました。これによって、さらなる読者層の開拓とテキスト読み上げなどにも対応できるインクルーシブなデザインに一步近づきました。また担当学芸員の計らいで、常設展示室の室内にも、Facata で紹介している資料には、特別なキャプションをつけるなど、館内展示との連携も進み、より意義あるメディアへと昇華できた実感を得た一年でした。

○世界遺産検定 VI グッズデザイン事業・沖ノ島検定プロモーションツール

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関する価値や魅力を全国の皆さんに知っていただくとともに、本遺産群の保存や活用の取組に賛同・参加していただくきっかけづくりとなる試験「沖ノ島検定」に関するグッズやプロモーションツールをデザインしました。中でも、令和 5 年度からスタートした最大難易度を誇る「上級検定」については、ロゴマークや認定カードをはじめ、ピンバッジなどグッズデザインまで展開し、合格者のプライドを高める一助となりました。また年度末付近には、令和 6 年度以降の受検者を増やすためのメディアとして、冊子と複数種のポスターをデザインしました。ポスターそのものが試験の問題になっているというアイデアで、これまでにないと好評を得られました。

④ ユニバーサルデザイン

第 20 期から活動を開始したユニバーサルデザイン（UD）セクション。新設の背景には、社会における「多様性・柔軟性に対応し、誰にでも分かりやすく伝える」ニーズの高まり、法の整備などの動きがありました。具体的には「障害者差別解消法」の改正による、指定管理事業者による障害のある方への合理的配慮が義務付けられたこと、また令和 6 年から民間事業者も「合理的配慮の提供」が義務化されたなどの要素があります。この社会的状況に鑑み、UD セクションは多くの人にわかりやすく情報を伝えることに注力し、活動を進めました。特に既存のシステムそのものを見直し、企画やメディアの役割に応じた情報提供方法の改善を実施しました。

○指定管理 MG 広報宣伝業務

各交流センターにおける古くなった情報の見直しを行いました。10 年前に作成されたウェブサイトは、次年度の事業計画にも含まれており、現状のままではウェブアクセシビリティの低い状態でした。そこで、レスポンス対応や文字の大きさ、色の設定などを見直し、ウェブアクセシビリティのレベル A に準拠するものに改善しました。

さらに、各館のニーズに応じた対応も行いました。「コミセンわじろ」では、トレーニング室の利用促進のためのチラシを作成し新しい利用者層を狙います。「さいとぴあ」では自治協と連携を

図るために「8 校区パネルの刷新」と、4 つの入口にある「案内サインの刷新」を行いました。これらの作業では、単にデザインを変更するだけでなく、防災の視点も取り入れて改善を行いました。

○ミニふくおか 2023

子ども文化コミュニティが主体となっていた「ミニふくおか」ですが、今年度は私たちが運営をサポートし、これまでとは異なる事務局体制で実施されました。時間をかけて開発が進められてきた「クエストカード」がミニふくおかの基盤となり、クエストという新しい挑戦を通じて子どもたちにまちづくりの仕組みを楽しく学べる機会を提供しました。また、会場全体の配置やサインを子ども目線でデザインしました。時間に応じて変化するスペースへのスムーズな誘導や、各コンテンツの楽しみ方を子どもたちが直感的に理解し、迷うことなく楽しむことができるようになりました。

さらに「ミニふくおか」に参加された視覚障害（全盲）の子どもへの対応も事前準備から当日のサポートまでデザインできたことで、とても楽しむことができ、ミニふくおかが障がいのある方でも楽しめるという新しい価値を付加することにつながりました。

○福津市共創による未来創造支援業務 HP 作成業務

この事業は、行政のサーバー内へのアクセスが必須となる事業でした。行政のサーバーには、決まったパソコンからしかアクセスできないなどの制限や、市と業者との契約上のデザインや CMS におけるカスタマイズの制約もあるため、制限が多い環境での業務となります。しかし、現場に足を運び、コミュニケーションを交わすことで、制限の中でも満足度の高いパブリックサービスのデザインが実行できました。

また、現場スタッフによる更新が定期的に行われるため、長期間サイトイメージが一貫して保たれるような維持の仕組みをデザインして提供し、ブランド力が下がらないサイトデザインを行なっています。

2 事業の実施に関する事項

(1) 特定非営利活動に係る事業

定款の 事業名	事業内容	実施 日時	実施 場所	従事者 の人数	受益対象者 の範囲及び 人数	事業費 の金額 (千円)
コミュニ ティ活 性の為 の支 援及 び 提 案 事 業	福岡市 NP0・ボランティア交 流センター「あすみん」指 定管理業務	令和 5 年 4 月 ～令和 6 年 3 月	福岡市 中央区	6 人	福岡市民 40,000 人	34,000
	福津市共創による未来創造 支援業務	令和 5 年 4 月 ～令和 6 年 3 月	当法人 事務所 及び福 津市	4 人	福津市民 4,000 人	13,000
	和白地域交流センター指定 管理業務	令和 5 年 4 月 ～令和 6 年 3 月	福岡市 東区	1 人	福岡市民 110,000 人	4,850
	西部地域交流センター指定 管理業務	令和 5 年 4 月 ～令和 6 年 3 月	福岡市 西区	1 人	福岡市民 140,000 人	4,850
	福岡市西市民センター指定 管理業務	令和 5 年 4 月 ～令和 6 年 3 月	福岡市 西区	2 人	福岡市民 7,000 人	5,500
	まちスポ福岡東運営支援業 務	令和 5 年 4 月 ～令和 6 年 3 月	福岡市 東区	2 人	福岡市民 5,000 人	2,800

コミュニティ活性化の為に 支援及び 提案事業	ミニふくおか 2023 ディレクション業務	令和 5 年 7 月 ～令和 6 年 3 月	当法人 事務所 及び福 岡市	4 人	福岡市民 2,000 人	11,000
	福岡市博物館ブランディングパートナー業務	令和 4 年 4 月 ～令和 5 年 3 月	当法人 事務所 及び福 岡市博 物館	2 人	福岡市民 70,000 人	725
	博多南地域交流センター企画・広報支援業務	令和 4 年 4 月 ～令和 5 年 3 月	当法人 事務所 及び福 岡市	2 人	福岡市民 70,000 人	300
	折尾駅北側まちびらきイベントワークショップ企画運営業務	令和 5 年 4 月 ～令和 5 年 6 月	当法人 事務所 及び北 九州市	10 人	北九州市民 900 人	1,175
	第 6 次大野城市総合計画後期基本計画市民ワークショップ運営業務	令和 5 年 4 月 ～令和 6 年 3 月	当法人 事務所 及び大 野城市	2 人	大野城市民 300 人	500

コミュニティ活性化の 為の調査研究 及び情報 提供事業	一財) 公園財団海の中道管 理センター「うみなかクリ スマスキャンドルナイト」	令和 5 年 8 月 ～令和 6 年 1 月	海の中 道海浜 公園	5 人	福岡市民 10,000 人	500
	四万十川流域の文化的景観 発信事業	令和 5 年 4 月 ～令和 6 年 3 月	当法人 事務所 及び四 万十市	2 人	四万十市民 2,000 人	2,100
	福岡市立東西体育館広報支 援業務	令和 5 年 4 月 ～令和 6 年 3 月	当法人 事務所 及び福 岡市内	3 人	福岡市民 100,000 人	884
	各種メディア作成業務	令和 5 年 4 月 ～令和 6 年 3 月	当法人 事務所 及び福 岡県内	3 人	福岡県民等 5,000 人	2,200
	各社 HP 維持管理・更新作業 他	令和 5 年 4 月 ～令和 6 年 3 月	当法人 事務所 及び福 岡県内	2 人	福岡県民等 100,000 人	1,100